

平成25年度
ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI
(研究成果の社会還元・普及事業)

実施報告書

HT25173

世界文化遺産の森を未来につなぐ！ PART II 春日山原始林でフィールドワークしよう



開催日：10月6日(日)

実施機関：大阪産業大学
(実施場所) (人間環境学部)
奈良春日山原始林

実施代表者：前迫 ゆり
(所属・職名) (人間環境学部・教授)

受講生：高校生4名

関連 URL：

【実施内容】

・受講生に分かりやすく研究成果を伝えるために、また受講生に自ら活発な活動をさせるためにプログラムを留意、工夫した点

本プログラムの特徴は、(1)研究での立ち入りしか認められていない(一般の立ち入り許可は一切認められていない)特別天然記念物・世界遺産の照葉樹林で高校生がシカの影響を観察し、(2)科研費で設置した防鹿柵に生育している植物と、防鹿柵外の植物の調査を行うことによって、(3)生態系における植物と動物の関係性について考える機会を設けたことである。今回は、残念ながら参加者が少なかったが、そのおかげで、調査や観察をゆっくり行い、説明することができた。またその後の大学でのディスカッションで、ひとりひとりが意見を述べ、意見交換することができた。フィールド実習、フィールドでの調査、その後の解析(測定値の平均値を出すなど)、その結果が示す数値の意味、そして考察(意見交換)という、研究の流れを高校生にも体験してもらうことができた。フィールドからディスカッションまでの流れ(プログラム)がよかったと考えている。

・当日のスケジュール

8:50	受付(大阪産業大学16号館1階ロビー集合)
9:00	大学出発(途中近鉄奈良駅で集合している高校生が乗車) 車中で開講式、あいさつ、オリエンテーション、科研費の説明
10:00-12:30	春日大社～照葉樹林を歩く シカ防鹿柵調査区の調査
12:30-13:30	若草山山頂で昼食 ○午前の総括と午後からの予定説明など
13:30-14:30	若草山山頂からバスで大学に向かう
14:30-15:45	クッキータイム 森の話をしよう:参加者のプレゼンテーション
15:45-16:00	修了式(アンケート記入、未来博士号授与)
16:00	終了・解散

・実施の様子(図、写真等を用いてわかりやく記入すること)



(オリエンテーション)



(森での調査風景)



(若草山山頂にて)



(森のはなし)



(参加者のプレゼンテーション)



(未来博士号授与)

オリエンテーションの後、実際に春日山原始林に入り、実際森で起きているシカの影響について観察した。この森は元々照葉樹林の森であったが、シカの個体数増加の影響を受け、生態系に顕著な変化が見られている。実際に森がシカの影響をどの程度受けているかを調べる手段として「防鹿柵」を森の中に設け、その周囲と違う植生になっている様子を受講生とともに調査した。特別天然記念物の森をどうやって生態系として戻して行か、シカとの共存のあり方を含め、課題であることを受講生とともに、再認識した。

・事務局との協力体制

- ・委託費の管理については、実施代表者と綿密に連絡を取り合いながら、産業研究所事務室が行った。
- ・日本学術振興会との連絡調整及び提出書類の確認等の事務手続きについては、産業研究所事務室が行った。
- ・広報活動、受講生募集、その他事業の実施に関しては、実施者と産業研究所事務室でプランを作成し、PR活動を行った。一部、学園広報課の協力を得ながら実施した。

・広報活動

- ・実施者(代表者、事務担当者等)が、近隣の高校や公共施設に本事業のチラシを郵送した。また併せて電話による説明と広報を行った。大東市教育委員会への後援申請も行った。
- ・大学の広報部署と連携し、ホームページに募集内容を掲載した。
- ・大東市の広報誌に募集案内を掲載した。
- ・奈良県、奈良市教育委員会を通じて、興味をもつ高校生を募った。
- ・集合は大学と近鉄奈良駅の2カ所とし、参加しやすい体制を整え、アピールした。

・安全配慮

春日山原始林は、基本的に危険な森ではないので、フィールドにおける危険はないと考えるが、万全の体制をとるため、4名(および学校引率教員1名)の参加者にたいして、研究者1名、補助者2名で実施した。

ヒル、マムシなど、人にとって、危害をおよぼす可能性のある動物については、事前に情報を伝えるなどして注意を促した。救急セットを用意した。また、安全のため、ヤッケと長靴を用意した。受講生、協力者は傷害保険に加入した。

・今後の発展性、課題

今回は9時から16時までほぼ1日を使用した。大阪-奈良の往復時間に1時間半強を要するため、フィールド、調査、大学に戻ってのディスカッションは時間的に、ぎりぎりであった。大学に戻らず、フィールドワークを十分に体験し、調査することに時間の大半を使い、その後、現地の適当な場所でディスカッションを行うなど、フィールド中心のプログラム実施を通して研究の楽しさや大学の自由度を感じてもらえるようなプログラムも可能と考える。モバイルプロジェクターも普及しているので、次回はすべてフィールドで実施することも考えたい。

【実施分担者】 なし

【実施協力者】 2 名

【事務担当者】 笠谷 千寿 産業研究所事務室